

音楽情報科学研究会夏のシンポジウム 1998 (第 26 回研究会) 開催のご案内 (第 1 報)

1998 年度の通称「夏のシンポジウム」は下記のように開催予定ですので奮ってご参加・ご発表をお願いします。またシンポジウムで開催を希望される企画などがありましたらお寄せください。

参加費 (宿泊費等) など、詳細については後日改めてご連絡いたします。発表申込は 5 月末頃、参加申込は 6 月末頃を締切に行う予定です。

* 今回は北大・文学部の阿部純一先生にお世話いただいております。

日時: 1998 年 8 月 7 日 ~ 9 日

会場: 北海道大学 文学部

宿泊所: ホテル北栄館 (北大前)

問い合わせ先: 平賀譲 (図書館情報大学) E-mail: hiraga@ulis.ac.jp Tel: 0298-59-1395 Fax: 0298-59-1093

音情研ホームページ <http://www.hamamatsu-pc.ac.jp/SIGMUS/> にも随時最新情報を掲載いたします。

研究会論文誌の発行について (お知らせ)

情報処理学会では平成 10 年度より制度改正を行い、研究会が独自に (正式な) 論文誌を発行できるようになります。その編集・発行方針は、基本的に全て研究会側に委ねられており、既存の (基幹) 論文誌とは一線を画するものです。背景や枠組みについての詳細は学会誌 2 月号会告 (付録) をお読み下さい。

現在、SIGMUS はこの新しい研究会論文誌に対して、検討部会 (working group) を作り、どう対応すべきかの検討を始めようという段階にあります。検討すべき項目は山積みで、例えば

- SIGMUS として研究会論文誌を発行することの是非、財政的裏付け
- 発行する場合、どのような形態・頻度にするか (年何回発行か、別途に論文を公募するか、研究発表会で発表されたものから推薦されたものを対象とするかなど)。
- その他 (例えば CD-ROM やビデオなどの媒体を使う等々)。

などです。

この件に関する検討結果等は、SIGMUS ホームページ等で順次お知らせして行きます。ご意見・ご希望などございましたら、主査の平賀 (fax: 0295-59-1093, email: hiraga@ulis.ac.jp) までお寄せ下さい。

現時点で、プログラミング研究会 (PRO)、数理モデル化と問題解決研究会 (MPS)、データベースシステム研究会 (DBS) + 情報学基礎研究会 (FI) はすでに研究会論文誌発行が決まったようです。どのような研究会論文誌を発行するのかという実施要綱は順次学会誌に掲載されるそうなので、実例の一つとして参考までにご覧頂けると良いかと思えます。

音楽情報科学メーリングリスト MACS の御案内

音楽情報科学について情報交換・議論するためのメーリングリストとして MACS があります。参加御希望の方は、

- Subject: (件名) を subscribe とし、(つづり間違いに注意!)
- 3 行以上の自己紹介を記したメールを、macs-ml@ei.nagano-nct.ac.jp 宛に、

お送りください。なお、詳しくは <http://www.ei.nagano-nct.ac.jp/Teachers/ohya/Macs/> まで。

SIGMUS 第 23 回 研究発表会 報告・質疑記録

「日米インターカレッジ・コンピュータ音楽フェスティバル」

1997 年 12 月 13 ~ 14 日 NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]

1997 年 12 月 15 ~ 16 日 慶應義塾大学三田キャンパス

***** 第 1 日プログラム 12 月 13 日 (土) *****

研究発表 1

- ミラー・パケット (カリフォルニア大学サンディエゴ校) 「Pure Data 経過報告」
 - 古川 聖 (Zentrum für Kunst und Medientechnologie) 「芸術の生まれる場として」
- コンサート 1

- 北原恵一 (岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー) 「metamorphosis」テープのための -1997-(10')
- 矢坂健司 (慶應義塾大学) 「Experiment 6」テープのための -1997-(7')
- カロス・グッデス (ニューヨーク大学) 「Etudes」テープのための -1997-(8')
- 大橋了久/山崎昭典 (大阪芸術大学) 「BLUE」コンピューターとガットギターのための -1997-(10')
— ギター:山崎昭典

コンサート 2

- 小泉朋子 (大阪芸術大学) 「ROU」音と映像、光 (照明) によるシアターピース
— 映像:舌間友美、照明:畠中泰正、パフォーマー:小泉朋子 (センサー・システム)
- 森 威功 (洗足学園大学) 「夢想」テープのための -1997-(15')
- 山下関哉 (早稲田大学) 「Bio Confuse」バイオミュージックとテープのための -1997-(7')
— バイオミュージック:山下関哉
- クリス・マーサー (カリフォルニア大学サンディエゴ校) 「Contraptionization I」4チャンネルテープのための -1997-(10')
- 松田 周 (国立音楽大学) 「swing Till Dawn」ソプラノ・サクソとライブ・コンピュータのための -1997- (10')
— ソプラノ・サクソ:矢邊新太郎

(1) Pure Data: Recent Progress

Miller S. Puckette (UCSD)

記録: 堀内靖雄 (千葉大)

講演者自身が開発している Pure Data(PD) プログラムの開発状況の報告が行なわれた。Music N やム-グ・シンセサイザーから始まる歴史として、4X、ISPW などを経て、MAXへ至る流れが語られ、PDの歴史的な位置付けが述べられた。そのあと、PDが実行できる可能性を持つプラットフォームが列挙され、さまざまな環境で実行できることが示された。音響と同時にグラフィックスも扱えるようになった PD を実際にデモンストレーションすることにより、簡単な使い方やその機能 (MAX と似ている面や異なる面を持っている) が紹介された。講演者の意図に反して、システムクラッシュなどの実演も行なってしまったが、Pure Data 開発の進行状況が分かる非常に興味深い発表であった。

(2) ZKM、芸術の生まれる場として 古川聖 (ZKM)

記録: 堀内靖雄 (千葉大)

ドイツにある Zentrum für Kunst und Medientechnologie (ZKM, 英語では Centre for Art and Media Technology) についての紹介が行なわれた。ZKM とは、州と市が財政を支える地方公共団体であり、「現代芸術」を創作、研究、展示するという、世界的にもユニークな存在である。また、ZKM の中でも Institut für Musik und Akustik (音楽と音響学のための研究所) について重点的に紹介が行なわれた。最後に講演者自身によるマルチメディアオペラ作品「まだ生まれない神々へ」に関して、その内容やシステムなどについての紹介も行なわれた。

(1) コンサート 1 記録: 堀内靖雄 (千葉大)

- 会議の最初を飾るコンサートでは以下の4作品が演奏された。
- 北原恵一 (岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー):「metamorphosis」テープのための
 - 矢坂健司 (慶應義塾大学):「Experiment 6」テープのための
 - Carlos Guedes (ニューヨーク大学):「Etudes」テープのための
 - 大橋了久 / 山崎昭典 (大阪芸術大学):「BLUE」コンピュータとガットギターのための

様々な手法を用いたテープ作品が中心であった。

(2) コンサート 2 記録: 堀内靖雄 (千葉大)

初日の夜のコンサートでは以下の5作品が演奏された。

- 小泉朋子 (大阪芸術大学):「ROU」音と映像、光 (照明) によるシアターピース
- 森威功 (洗足学園大学):「夢想」テープのための
- 山下関哉 (早稲田大学):「Bio Confuse」バイオミュージックとテープのための
- Chris Mercer (カリフォルニア大学サンディエゴ校):「Contraptionization I」4チャンネルテープのための
- 松田周 (国立音楽大学):「swing Till Dawn」ソプラノ・サクソとライブ・コンピュータ・システムのための

このセッションからはインタラクティブ性のある作品も登場した。とくに松田氏による作品ではリアルタイムでの音と映像によるインタラクションが用いられ、非常に興味深いものであった。

***** 第2日プログラム 12月14日(日) *****

コンサート 3

- 後藤真孝 (早稲田大学) 「Internet RemoteGIG」(10')
— キーボード (東京):リック・バセット
- 猪平雅史 (早稲田大学) 「犬の散歩」テープのための -1997-(7')
- 小倉一平 (岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー) 「assong for microphone inside the body」-1997-(10')
— パフォーマンス:小倉一平

コンサート 4

- リューク・デュボワ 「Richetta」テープのための -1997-(12')
- 三村竜太郎 (国立音楽大学) 「Echoes # Labyrintos Case-vita」テープのための -1997-(10')
- ジェフ・リデナウア (カリフォルニア大学サンディエゴ校) 「Improvisation」コントラバスとエレクトロニクスのための -1997-(10')
— コントラバス:溝入敬三

コンサート 5

- ロバート・ロー (ニューヨーク大学) 「シェルズ」ソプラノ・サクソとインタラクティブ・ミュージック・システムのための -1993-(8')
— ソプラノ・サクソ:矢邊新太郎
- 坂口 陽 (早稲田大学) 「静穏 ~ Silence ~」テープのための -1997-(4')
- バリー・ムーン (ニューヨーク大学バッファロー校) 「習作」声と ISPW のための -1993-(8')
— ソプラノ:森川 泉
- 家長真行 (早稲田大学) 「flowers for the scramble-tape」-1997-(4')
- ジョシュア・フリード (ニューヨーク大学) 「Shoes, Loops and FM Radio for THE MUSICAL SHOES」-1989-(10')
— ミュージカル・シューズ:ジョシュア・フリード
- リック・バセット 「Axe to Grind」テナーサクソ、キーボード、コンピュータのための -1997-(10')

— テナー・サククス:森近 徹、キーボード:リック・バセット

ソプラノ・サククス: 矢邊新太郎

(1) 「Internet RemoteGIG」

後藤真孝 (早稲田大学)

キーボード (東京): リック・バセット

感想: 荒木円博 (豊田中研)

インターネットを介して、ニューヨークと MIDI のやりとりを行いながら進行したライブだった (フュージョン風の伴奏つき)。

本来は、ニューヨーク側の演奏風景も、インターネット経由で東京側に表示される予定だったが、そちらはうまくいかなかった。それゆえ、逆に MIDI 中継に用いられた RMCP (Remote Media Control Protocol) の頑強さを感じた。

なお、曲間の伴奏のない時のニューヨークとのかけあいが、予想外にうまくいっていて、驚いた。

(2) 「犬の散歩」テープのための

猪平雅史 (早稲田大学)

感想: 荒木円博 (豊田中研)

ジムノペディ 1 番と、展覧会の絵 (プロムナード) とが、互いにフレーズレベルでモーフィング (MAX のフレーズモーターを利用) しながら、演奏される作品だった。

モーフィング途中にかなり不自然な感じのフレーズも鳴っていたが、同時に鳴っていた鳥の声などの効果音によって、全体としてはまとまった感じに聞こえた。

(3) 「assong for microphone inside the body」

小倉一平 (岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー)

パフォーマンス: 小倉一平

感想: 荒木円博 (豊田中研)

ノイズによって構成されたミニマル・ミュージックという印象を受けた。

(4) 「Richetta」テープのための

リュック・デュボワ (コロンビア大学)

感想: 荒木円博 (豊田中研)

雑音まじりの語り (作曲家とその祖母の間の会話のうち、祖母の部分) に、オルガン風の音や古楽風のギターなどが重なった作品で、映画音楽のような印象を受けた。

演奏の部分は、会話のうち、作曲家の部分を元にしてのこと。

(5) 「Echoes # Labyrintos Case-vita」テープのための

三村竜太郎 (国立音楽大学)

感想: 荒木円博 (豊田中研)

この作品は、音楽そのものより、正面に据えつけたビデオモニターとそれを撮影するビデオカメラによる生のビデオフィードバックが印象的だった。

(6) 「Improvisation」コントラバスとエレクトロニクスのための

ジェフ・リデナウア (カリフォルニア大学サンディエゴ校)

コントラバス: 溝入敬三

感想: 荒木円博 (豊田中研)

コントラバスと、その音に反応して別の音を出すコンピュータとの共演だった。緊張感のある素晴らしい演奏だった。

(7) 「シェルズ」ソプラノ・サククスとインタラクティブ・ミュージック・システムのための

ロバート・ロー (ニューヨーク大学)

感想: 荒木円博 (豊田中研)

大まかには (6) と同様な作品だった。吹いた音を実時間で加工した音と、ピッチ検出によって制御される別の楽器音の両方が使われていた。

(8) 「静穏 ~ Silence ~」テープのための

坂口陽 (早稲田大学)

感想: 荒木円博 (豊田中研)

シンセサイザによるニュー・エイジ・ミュージックといった印象を受けた。

(9) 「習作」声と ISPW のための

バリー・ムーン (ニューヨーク大学バッファロー校)

ソプラノ: 森川泉

感想: 荒木円博 (豊田中研)

(6)(7) に似たタイプの作品だが、こちらは生の声と、声を実時間で加工した結果だけだった。そのシンプルさゆえ、より迫力を感じた。

(10) 「flowers for the scrambletape」

家長真行 (早稲田大学)

感想: 荒木円博 (豊田中研)

印象としては、「千のナイフ」(坂本龍一) に変則的なリズムのジャングルを加味した、といった感じだった。

(11) 「Shoes, Loops and FM Radio for THE MUSICAL SHOES」

ジョシュア・フリード (ニューヨーク大学)

ミュージカル・シューズ: ジョシュア・フリード

感想: 荒木円博 (豊田中研)

個人的にはこの作品がもっとも印象に残った。この作品は、演奏者が、目の前に並べられた裏返し靴を叩くことによって、あらかじめ用意した音の繰り返しや、その場で鳴らしたラジオの何秒か分の音の繰り返しを on/off するものだった。(靴にはピックアップが取り付けられている) その場で、ラジオを鳴らしながら観客の「ウケ」の良かった部分をサンプリングしたり、靴を使って制御するなど、おもしろい作品だった。

(12) 「Axe to Grind」テナーサククス、キーボード、コンピュータのための

リック・バセット

テナー・サククス: 森近 徹、キーボード: リック・バセット

感想: 荒木円博 (豊田中研)

この曲は、サククスを鳴らさずに息だけ吹き込んだ音 (とそれを実時間処理した音) から始まった。その後、生演奏に対応して、コンピュータによるリズムセクションが加わり、「ノリノリ」な感じに盛り上がっていった。

途中、リズムセクションが「太陽と戦慄パート I」(キング・クリムゾン) の始めのような、おとなしめのパーカッション演奏になるなど、かなり変化に富んだ作品で、楽しめた。

***** 第3日プログラム 12月15日(月) *****

研究発表 2

- ハリー・キャッスル (カリフォルニア大学サンディエゴ校) 「"Scotch, twice" における人とマシンによる即興演奏の確信」

- リューク・デュボワ (コロンビア大学) 「作曲のための実例としての信号処理技術の意味」
- 小有利子 (コロンビア大学) 「作曲家としてのコンピューター・ミュージック作品へのアプローチ」

研究発表 3

- テリー・ベンダー (コロンビア大学) 「パフォーミング技術」
- コート・リッピ (ニューヨーク大学バッファロー校) 「作品 "Music for Piano and Computer" の解説」
- ロバート・ロー (ニューヨーク大学) 「2つの高度に統合された実時間音楽・画像演奏システム」

パネル・ディスカッション 1

- 「インタラクティブ・コンピュータ・ミュージック・システム」司会: 葉孝之パネリスト: テリー・ベンダー、ミラー・パケット、ロバート・ロー、コート・リッピ

コンサート 6

- 今井慎太郎 (国立音楽大学音楽デザイン学科) 「レアメタル」フルート、打楽器と ISPW のための -1997-(10')
- フルード: 高嶋由衣、パーカッション: 川田絵里子、片山美穂
- 小島有利子 (コロンビア大学) 「REMINISCENCE」テープのための -1996-(8')
- カルロス・デルガド (ニューヨーク大学) 「Polemics」ピアノとテープのための -1997-(8')
- ピアノ: 坂上あおい
- クリストファー・ペンローズ (慶應義塾大学) 「DAT テープのためのドウドウヘッド」-1997-(12')
- エリック・オニヤ (ニューヨーク大学バッファロー校) 「Marco Polo」MIDI ピアノと ISPW のための -1997-(9')

 ***** 第4日プログラム 12月16日(火) *****

研究発表 4

- ジョシュア・フリード (ニューヨーク大学) 「機械への尋問」
- バリー・ムーン (ニューヨーク大学バッファロー校) 「開かれた形式の作曲におけるスコア・フォローイングとリアルタイム信号処理戦略」

コンサート 7

- 大仲文毅 (慶應義塾大学) 「AC2(Inspired A-life)」テープのための -1997-(10')
- 北脇 歩 (大阪芸術大学) 「作品 30」ハードディスクレコーダーのための -1997-(10')
- 日比野元彦 (早稲田大学) 「Pinger」テープのための -1997-(8')
- テリー・ベンダー (コロンビア大学) 「Cregg's Pipes」マンドリンとテープのための -1996-(9')
- マンドリン: テリー・ベンダー
- ハリー・キャッスル (カリフォルニア大学サンディエゴ校) 「Scotch, twice」MIDI ピアノ, Amiga マイクロコンピュータ, 2人の奏者のための -1997-(10')
- ピアノ: ジョー・ペンドローニ

研究発表 5

- 梅本あずさ/内山幹乃扶/河合敦夫/椎野 努 (三重大学大学院 工学研究科 情報工学専攻) 「音楽理論と経験的知識を整合活用した作曲支援システム」

合活用した作曲支援システム」

- アクセル・マルダー/シドニー・フェルス/間瀬 健二 (ATR 知能映像通信研究所第2研究室) 「仮想物体の形状操作と音変化の対応づけ」

パネル・ディスカッション 2

- 「コンピュータ音楽とマルチメディア・アート」司会: 上原和夫パネリスト: ジョシュア・フリード、ハリー・キャッスル、バリー・ムーン、リューク・デュボワ、高城 修 (国立音楽大学)、荻森大介 (大阪芸術大学)

コンサート 8

- 毛利千明 (国立音楽大学) 「アンダー・ザ・コントロール」MIDI ピアノ, ヴァイオリン, SGI コンピュータと ISPW のための -1997-(8')
- バイオリン: 手塚里巳, ピアノ: 佐藤文字
- 東野珠実 (慶應義塾大学) 「dinery 2」笙とライブ・コンピュータのための -1997-(13')
- 笙: 東野珠実
- コート・リッピ (ニューヨーク大学バッファロー校) 「Music」ピアノとコンピュータのための -1996-(18')
- ピアノ: 渋谷 淑子
- ミラー・パケット (カリフォルニア大学サンディエゴ校) 「Improvisation」MIDI ピアノと SGI コンピュータ (Pure data) のための -1997-(7')
- ピアノ: リック・パセット, マンドリン: テリー・ベンダー, SGI: ミラー・パケット, ISPW: コート・リッピ

- (1) 音楽理論と経験的知識を整合活用した作曲支援システム
 梅本あずさ、内山幹乃扶、河合敦夫、椎野努 (三重大学)
 記録: 平賀讓 (図情大)

作曲支援システム CAMUS についての発表で、表題のように、音楽理論と経験的知識の統合・活用をめざしたものである。ここで経験的知識とは、実際の曲データから抽出された各種情報を指すらしい。筆者はデモを見る機会があったが、なかなか楽しいシステムである。しかし個別の特徴はあるにせよ、全体印象として「よくあるシステム」というのを与えがちで、この主のシステムは評価が難しいという点とも相まって、今後の内容的な深化、分析が期待される。

- (2) Mapping virtual object manipulation to sound variation

Axel G. E. Mulder, S. Sidney Fels and Kenji Mase (ATR)
 記録: 平賀讓 (図情大)

データグローブ (Cyberglove) などを用いて、仮想空間で「音彫刻」を行うためのインタフェース・システムである。インプリメントには MAX/FTS が用いられている。楕円体やゴム・シートなどのメタファで表される仮想オブジェクトを操作することで発音される音響が制御される。興味深いシステムであり、適切な動作・音響のマッピングの設定や実時間対応性などにおいて、今後の発展が期待される。もっともなぜ「仮想オブジェクト」でなく、実在のオブジェクトへの操作をセンシングしないのかという疑問は残るが(そういった研究も行われている)。